

An Interpretation of the Twenty Third Paragraph in "Analects of Confucius"

— 'Zi Lu , The Thirteenth Chapter' —

TAMAKI Naoyuki

Research and Education Faculty Humanities and Social Science Cluster

Humanities and Social Sciences Unit

Kochi University

ABSTRACT

This paper does not intend to give new interpretations of "Analects of Confucius", but tries to give a presentation showing the grounds for interpretation. I have tried to interpret the twenty third paragraph in 'Zi Lu , The Thirteenth Chapter'.

『論語』講読
—
「子路第十三」二三—
—

玉木 尚之 (高知大学教育学部人文社会科学系人文社会科学部門)

はじめに

- 一 「子路第一三」二二三の口語訳
- 二 漢和辞典による解釈
- 三 諸訳書に見る解釈
- 四 文脈による検討
- 五 『論語』の他の孔子の発言による検討
- 六 まとめ

はじめに

小稿は、「『論語』講読のために」方法と「学而第一」一の解釈（二〇一〇）・「『論語』講読」―「学而第一」三（二〇一一）（注一）、に続いて、『論語』の「子路第一三」二二三の解釈を提示するものです。論述の主眼は、必ずしも『論語』についての新しい解釈を提示することにはありません。主眼は、『論語』をその用例に根拠を求めて読む、その過程を明示すること、その示し方そのものにあります。

解釈の態度と方法の詳細については前稿に譲り、ここでは要点のみ再掲します。解釈のための方法は極めて基本的なものです。

- ・ 岩波文庫『論語』（金谷治訳）（注二）をテキストとして、訓読・口語訳等で概要を知る
- ・ 漢和辞典で語の一般的意味を確認
- ・ 諸訳（注三）を参観して意味の概要や翻訳の相違などの問題点を概観
- ・ 『論語』における語の用例や関連発言を参考に、訳出すべき語の意味の吟味
- ・ 注釈や他の古典は基本的に参照しない（それらによる『論語』解釈の妥当性は、結局『論語』の用法によって吟味するしかないからです）

以下、テキストである岩波文庫の参照章については、篇名・篇中の章順・頁数を記します。ただし、常用漢字に変更し、句読点や書き下し文も適宜変更している場合があります。参照の章で詳しい解釈がとりあえずは必要ないとみなした箇所は、通常の読みに従ったり、またあえて意味をあいまいなままにして訓読したりする場

合もあります。

- 一 「子路第一三」二二三の口語訳
- 岩波便子の金谷治訳を掲げます。

子曰、君子和而不同、小人同而不和。（二六五頁）

子曰わく、君子は和して同せず、小人は同じて和せず、と。

金谷訳「君子は人と調和するが雷同はしない。小人は雷同するが調和はしない」

原文が簡潔なのですが、金谷訳もあまり補足することなく簡潔で、読者の解釈に委ねる姿勢が強いようです。「為政」篇の一四を参照に挙げているだけで特に解説もありません。

「和」の訳は「人と調和する」と、わかるようでわからないものです。

「雷同」は、出典は『礼記』（曲礼上篇）ですが、ここでは訳語としての日本語ですので国語辞典の『デジタル大辞泉』で引くと、「自分自身の考えをもたず、むやみに他人の説や行動に同調すること」とあります。

「君子」と「小人」はそのままですが、まあ対照的に対置されているのは推測できるので、その対置を受ければ、「調和する」とは「雷同」を裏返して「自分自身の考えをもちつつ、むやみに他人の説や行動に同調しないで調和的に接する」というようなことになるのでしょうか。

ただ、「雷同」は「付（附）和雷同」と四字熟語でも使用され（注四）、そこでの「和」は「同」と同義的なものになっていますので、この章の訳語として使用するのには混乱を招きかねずあまりよろしくないように思います。また、「和」と「同」を対人的な態度か性質のようなものを言うものと捉えています。また、そもそもその根拠は何なのでしょう。よく考えてみると疑問に満ちています。いずれにせよ「和」と「同」についてももう少し突っ込んで考えてみなければなりません。

- 二 漢和辞典による解釈

まず「和」です。『新漢語林』を引くと、「やわらぐ、なごむ、おだやかに」に続いて「仲よくする、気が合う」があり、ここにこの「子路」篇の発言を示して「うまく調和する」と訳文を載せます。ちなみにこの訳文の「同」の部分は「人の意見にわけもなく賛同する」としてあります。

次に「同」です。「おなじ、ひとしい、一緒、共通している」に続いて、「おなじくする、ともにする、一つにする、一緒にする」の並びに「特に（和）に対して、主体性のない共同をいう」とし、「付和雷同」を挙げた後に『論語』のこの章を示して「他人の意見におもねたり従う」という訳を加えています。

こうして見ると、「和」「同」のそれぞれの主要な意味に加えて、『論語』のこの章の解釈に由来する意味を示していることがわかります。その「同」の解釈を参照すると、「和」は「主体性を保ちながらの共同」とでもなるのでしょうか。ただ、「同」については「人の意見にわけもなく賛同する」「主体性のない共同」「他人の意見におもねたり従う」と微妙にニュアンスの異なる口語訳が示されていて、どこからそれが出てくるのかとまどいます。つまり、「和」についても先ほど「主体性を保ちながらの共同」とかと推測したもの、その元とした「同」の解釈がそもそも不明です。

語意の方向性としては「和」と「同」は本来類義性を持つものですが、それが反義を含むのは『論語』のこの章の解釈に由来し、先にも推測したように、そこで両者が「君子」と「小人」の行動なのか性質なのかに振り分けられているためです。後で少し詳細に見ますが、とりあえず『新漢語林』を引けば、「君子」は「学徳のあるりつばな人、官職にある人、君主、為政者」、「小人」は「身分の低い人、徳のない人、心の正しくない人」ということになります。従って、「和」はプラスの評価、「同」はマイナスの評価を与えられていることがわかるわけです。が、漢和辞典でわかるのはここまでで、「子路第一三」二三の解釈がなぜそのようなのかは結局よくわかりません。

三 諸訳書に見る解釈

金谷訳以外のいくつかの訳注を挙げます。

加地伸行の口語訳。

「教養人は、和合するが雷同はしない。知識人は、雷同はするが和合はしない」
(加地 三二二頁)

「君子」「小人」の独自訳の是非は置いておくとして、他は金谷訳と概ね同じです。「和」を「和合」と訳出したことで、対人関係についてのことだと明瞭になるのでしょうか。

吉川幸次郎の口語訳。

「君子はそれぞれに主体性をもちつつ、人人と調和するが、附和雷同はしない。小人はその逆である」

「和」について「主体性をもちつつ」と、辞書で見たのと同じ補足があります。

また、説明部分に『春秋左氏伝』の昭公二〇年の記事を参照すべきと述べ、その内容を示します。それは、あるお気に入り臣下と自分は「和」すると述べた齊の景公に対して宰相の晏嬰が、それを「同」だとして、「和」はスープの調味料のようなもの、水に水を足したり、琴の同じ弦ばかり弾いたりするのが「同」だと解説した記事です。(吉川 中一四一頁)

『春秋左氏伝』は孔子に始まる儒家の文献ですから、一見この章の理解にうってつけという感もありますが、『論語』の孔子の発言の真意を理解しようとする場合に、安易に他の文献や他者の発言を使うのは慎むべきであろうと考えます。補足的参照に止めるべきでしょう。

木村英一の口語訳。

「君子は（主体性を失わずに人と）調和するが、（主体性を放棄して人に）雷同することはしない。小人は（主体性のない）雷同をするが、（主体性を保ちつつ）調和することはない」

語釈に『左伝』の昭公二〇年の記事を参照せよと指摘します。(木村 三四八頁)

見たとおり吉川とほぼ同じです。

宇野哲人の口語訳

「君子は人に接するのに垂き戻ることなく互いに和らぎ親しむけれども、常に道理にかなうか否かを考えるから猥りに媚び親しんで合同することはしない。小人は反対に媚び親しんで合同するけれども、私利を求め権勢を争うて互いに排斥するから、垂き戻ることなく和らぎ親しむことはできない」

〔解説〕の参照に、「為政」篇一四の「君子は周して比せず、小人は比して周せず」を挙げています。（宇野 三九九頁）

南宋の朱子の『論語集注』による解釈のためか詳しい解釈になっていきます。「同」を「媚び親しむ」とし、それをするかしないかの理由を、「私利」を求めるか「道理」にかなうかに限定しています。これは「里仁」篇一六の「君子は義に喩り、小人は利に喩る」を関連づけた解釈かと思われます。「同」の「合同」はよくわからない訳語です。

また解説では、金谷と同じく「為政」篇の一四を参照に挙げていますが、どのように関係するのかの説明はありません。これらの参照の妥当性については後に考察します。

貝塚茂樹の口語訳。

「君子は他人と心から一致するが、うわべだけ同調することはしない。小人はうわべだけ同調するが、心から一致することはない」

* 「和」ということは、二つの異なる心を持った人間が、心から打ち解けて友人となることである。これに対して「同」とはほんのうわべだけの友となることである。（貝塚 三七六頁）

友人となることについての発言に限定して独自ですが、根拠は不明です。「和」を「他人と心から一致する」と訳すのは、どうもそんなことがあり得るのか疑いませぬが、補足説明で「二つの異なる心を持った人間が、心から打ち解けて友人となるこ

と」とあるので、それならまあわかります。しかし、いずれにせよ友人関係について「和」「同」を言うような発言は他にないので、この解釈は無理があるでしょう。以上、訳本には紙幅の制約があつてしかたのないことですが、これらからこの章の口語訳を見ても、先に辞書で見た以上の解釈根拠はほとんど見出せません。わずかに、参照対象が示されたり、暗に参照された章が推測されたりするばかりです。

四 文脈による検討

この章の文脈から明瞭なのは、まず「君子」と「小人」が対置され、態度などの性質なのか何なのかわかりませんが、それぞれに「和」と「同」が当てられ対置されていることです。

二で述べたことと重なりますが、『新漢語林』によれば、「君子」は「学徳のあるりつばな人、官職にある人、君主、為政者」を表す語、「小人」は「身分の低い人、徳のない人、心の正しくない人」などと説明されていました。そうすると、「和」はプラス評価、「同」はマイナス評価となります。両語の主要な意味にはいずれもそのような価値評価は含まれるとは思えないので、この章の孔子の発言において「和」と「同」にひとつの対置的価値評価が与えられていることになるでしょう。「和」の主要な意味としては「やわらぐ、なごむ、おだやかにする」や「仲よくする、気が合う」が挙げられていました。後者ははっきり対他的な態度や性質と見ることができますが、前者は必ずしも対他的態度や性質に限定されず、本人そのものの態度や性質そのものとも取ることが可能です（対他的態度が身について性質化したもの）。

一方「同」はどうも本人の態度や性質を意味すると見るのは困難です。対他的なものと考えざるを得ません。物に対して「同」というのは日常的には考えにくいので、やはり他人に「同」するのであるかと考えられます。そこから、諸訳がそうしているように「和」もまた人に対する態度や性質とすることができるとは思います。

さらに、他人に「和」することが意味するものの振幅が大きいのに対して、「同」は少し限定的であるように思われます。他者と心身が「同」になることは考えられませんが、日常的な場で態度として他者に同調するということになるでしょう。相手に同調するのは、自分に意見や思いがない、あるいはあつてもそれを置いておいて、そうして同調する方が何か好ましい結果を期待できる、など様々な理由が考

えられます。

その「同」との対置において、「和」はどのような態度と考え得るでしょうか。「君子」は自身の意見や思いがない人のようではありません。すると、当然他人にただ同調するとは思えません。けれども「親しむ」のですから、やはり自身を抑えるのでしょうか。同調にまで至らずそこそこ親しむということでしょうか。それとも自身を主張しながらも親しむという難しいことができるのでしょうか。この章の本文から読み取れる、推測されるのは、その辺りまでかと思えます。

五 『論語』の他の孔子の発言による検討

五・一 「和」「同」の用例による検討

孔子が「和」を使用した発言は、実はこの章の他には一例しかありません。

丘也聞、有国家者、不患寡而患不均、不患貧而患不安、蓋均無貧、和無寡、安無傾。夫如是、故遠人不服、則修文德以來之、既來之則安之。・・（季氏第一六・一 三二六頁）

私の聞くところでは、「国や家を所有する者は、人が少ないことを気にかけず扱いが均しくないことを気にかけ、貧しいことを気にかけず安らかでないことを気にかける」とか。思うに、均しければ貧しいことはなく、「和」すれば少ないということではなく、安らかなら傾くこととはなく、そもそもそういうことだから、遠くの人が服従しないなら、文徳を修めて彼らがやってくるようにし、やっ来てたら安らかにしてやる。・・

「和」は民が懐いてくる為政者の態度を言い、文脈から「文徳」を修めることがそれに当たるように読めますが、「やわらかく、なごむ、おだやか」といった辞書の主要な意味以上の具体性は読み取れません。また、主体が「国や家を有する者」であり、「和」は下位者に対する態度ということになるでしょうから、対義的な「同」を想定することが難しそうです。

「同」については、「子路」篇二三の「小人」の態度か性質理解の参考になるような発言例は他に見当たりません。

一・五・二 「君子」「小人」についての言及からの検討

「和」と「同」は「君子」と「小人」の態度か性質的なものですから、彼らについての他の言及から何か手がかりが得られないでしょうか。

まず、三で金谷や宇野が参照に挙げていた発言です。

子曰、君子周而不比、小人比而不周（為政第二・一四）

「君子」と「小人」が対置され、それぞれに「周」と「比」という態度か性質が当てられるもので、構造も「子路」篇二三と同じです。金谷は、「君子はひろく親しんで一部の人もおねねすることはないが、小人は一部でおもねりあつてひろく親しまないと」と口語訳します（四二頁）。

『新漢語林』は、「周」には「あまねし、ゆきとどく、ゆきわたる、手落ちがない」などを示します。「比」には「くらべる、ならう、まねをする、なれる」などに次いで、「したしむ、たのしむ、合わせる、したがう」の並びに「子路」篇二三を引いて「くみする、仲間を作る、おもねる」などの意味を記します。ちなみにその訳文は「君子は誠実で親密であり、一部の人のみにおもねらない」という、本文からは相当に逸脱したものとなっています。

「周」はあまねき状態、「比」はならぶわけなので一部感があるでしょうか。しかし、取りようによつては親しむという類義的方向も含まれますし、ましてともと価値観を伴うわけではなさそうです。「和」「同」同様に、孔子の発言によつて対置的な価値評価の意味合いが加えられ、さらに「小人」の「おもねり」という付度的意訳が加えられたものと考えられます。

この章が金谷訳や『新漢語林』の訳のように解釈されるには他の章を結び付けた相応の補足が必要なので、「和」「同」の理解の参照としてこの章をいきなり挙げるのは必ずしも適切ではないと思われれます。

宇野訳のよつていた『論語集注』がふまえていると思われる発言はどうでしょう。

子曰、君子喻於義、小人喻於利（里仁第四・一六）

金谷訳では「君子は正義に明るく、小人は利益に明るい」（七八頁）で、「明るい」はよくわかりません。吉川や木村の「敏感（吉川 上二二頁、木村 九〇頁）」あたりがわかりやすいでしょうか。「喩」を使う孔子の発言は他にはありませんので、ニュアンス確定はなかなか難しいでしょう。

四で推測しましたが、「小人」の同調には理由がありそうです。それをこの章と関連づけると「利」となる訳です。また、「君子」は自分の意見や思いを持っていて、そうだと推測しましたが、それが「義」に結びつきそうです。

類似の発言は、

子曰、君子易事而難説也、説之不以道、不説也・・・小人難事而易説也、説之雖不以道、説也・・・（子路第一三・二五 二六六頁）

君子には仕えやすいが喜ばせるのはむづかしい。道義によつて喜ばせるのでなければ喜ばない・・・小人には仕えにくい、喜ばせるのはやさしい。喜ばせるのに道義によらなくても喜ぶ・・・

があり、ここでは「君子」の喜ぶものが「道」とされています。

さらに「君子」と「道」については、

子曰、道不同、不相為謀（衛靈公第一五・四〇 三二三頁）

志す道が同じでなければ、たがいに相談しあわない。

ともいいます。

これらを見ると、「義」や「道」を重視する「君子」はなかなか他者との調和的な関係を作るのは難しそうな気がします。が、そこは凡人ならぬ「君子」なのでしょう。

子曰、君子矜而不争、群而不党（衛靈公第一五・二二 三二四頁）

君子は矜持をもちつつも争わない、大勢といっても党派を組まない。

孔子の「君子」は矜持を持ちつつも、他者と争わないことができる人なのです。そして、集団の中で特定のグループを作らないとも言います。「周して比せず」をこ

れと関連づけることができるのかもしれませんが。そういう付き合いが「君子」の他者との「和」のあり方なのでしょう。

補足すれば、弟子が孔子から聞いたと思われる内容ですが、

子張曰、・・・異乎吾所聞、君子尊賢而容衆、嘉善而矜不能、・・・（子張第一九・三 三七八頁）

私が聞いたこととは違う。君子はすぐれた人を尊びながら一般の人々をも包容し、善い人をほめながらだめな人にも同情する（「矜」は「あわれむ」と解釈）。

があり、これによると、自身の「義」や「道」を温めつつ、尊ぶべき者を尊び、不足者をも寛容に扱うこと、それが「和」の少し具体的な内容なのかも知れません。

六 まとめ

以上、「子路第一三」二二についてこれまでに見てきたことを簡単にまとめます。漢和辞典『新漢語林』には、すぐれた人物とみなされる「君子」についての「和」という語については、「やわらかく、なごむ、おだやかになる」に続いて「仲よくする、気が合う」などの意味を記し、その続きにこの「子路」篇のこの章の発言を示して「うまく調和する」と訳文を載せます。ちなみに「同」は「人の意見にわけもなく賛同する」と訳しています。

「同」には、「おなじ、ひとしい、一緒、共通している」に続いて、「おなじくする、ともにする、一つにする、一緒にする」という意味を記し、「特に「和」に対して、主体性のない共同をいう」と説明して、さらに『論語』のこの章を示して「他人の意見におもねたり従う」という訳を加えています。

「和」と「同」は、主要な語意としては類義性を持ち、価値評価を含むものではありませんが、『論語』の解釈によつて前者がプラス評価、後者がマイナス評価となる対義の意味を与えられたようです。しかし解釈の根拠は、諸訳同様不明です。この章の短い本文自体からわかるのは以下のようなことです。

文脈から明瞭なのは、「君子」と「小人」が対置され、それぞれの態度か性質かに「和」と「同」が当てられ、そのためプラス評価とマイナス評価を与えられてい

ること。

「和」の主要な意味では対他的な発言と限定できないこと。一方「同」は対他的なものと考えざるを得ず、また、物に対して「同」というのは日常的には考えにくく、他人に心身が「同」となることはないで、他者に態度として「同調する」と捉えることができそうであること。それとの対照において「和」もまた対人的な態度か性質などと判断ができ、「同調」ではないので、「君子」は自身を保ちつつ他者とそこそこ親しむのか、主張しながらも親しむという難しいことができるのか、そのような推測ができること。

本文からの以上のような推測について、『論語』の孔子の他の発言を参照した検討からわかるのは以下のようなこととす。

「小人」は「利」に敏感であると言われるので、他者に同調するならばそういう理由が想定されるであろうこと。一方「君子」は「義」や「道」を重視するので容易に他者とは同調できないであろうこと。ただ「君子」は争わず、集団にいても党派を作らず、上位者は尊重し下位者には寛容にするなどと言われているので、自身の「義」や「道」を温めつつ、それで他者を排除することなく広く他者に親しむ能力を持った者なのであるということ。

以上をふまえた口語訳を試みるなら、「立派な人物は主体性を保ちつつ他者と親しみ、他者に同調することはしない。つまらない人物は他者に同調し、主体性を保って親しむということではない」

注

一 玉木尚之、「『論語』講読のために―方法と『学而第一』一の解釈」（『高知大学教育学部研究報告』第七〇号 二〇一〇）。尚、続編として「『論語』講読」『学而第一』三」（『高知大学教育学部研究報告』第七一号 二〇一一）もある。

二 『論語』（金谷治訳注、岩波文庫、一九六三第一刷、一九九九改訂第一刷）
他に参照する訳注書

加地伸行全訳注『論語 増補版』（講談社学術文庫、二〇〇九）

吉川幸次郎『論語』（全三冊、朝日新聞社、一九七八）

木村英一訳、注『論語』（講談社文庫、一九七五第一刷、一九八〇第四刷）

宇野哲人『論語新釈』（講談社学術文庫、一九八〇）ほぼ南宋・朱子の『論語集注』の解釈による

貝塚茂樹訳注『論語』（中公庫、一九七三）

四 「附和雷同」は、『大漢和辞典』にも熟語として一応載せませんが、出典記載がありませんので古典的な漢語の成語ではなさそうです。『日本国語大辞典』の出典も島崎藤村『夜明け前』ですから、我が国における使用の歴史も比較的浅いものようです。ちなみに大東文化大学中国語大辞典編纂室編『中国語大辞典』（平成六）にも成句としては載せてはいますので、現代中国でも使うのかも知れません。